

# 地虫

小栗虫太郎

青空文庫



一、あか紅い水母くらげ

大都市は、海にむかつて漏泄ろうせつの道をひらいている。その大暗あ渠んきよは、社会の穢粕かすと疲憊ひはいとを吸いこんでゆく。その汚水は、都市の秘密、腐敗、醜悪を湛えてまんまんと海に吐きだす。ところが、どんな都市でも、その切り口を跨いだあたりに奇異ふしぎな街があるのだ。

そこは、劃然と区切られた群島のようなもので、どこにも橋の影を落さぬ、水というものがない。影は影に接し、水はくらく、しかも海にちかく干満の度がはげしい。ぐるりは、ギラつく油と

工場の塀で、まさに色もなにもないまっ黒な堀水である。

そんなわけで、もしも端はすれの一つに橋がなかったとすれば、その一劃は、腐泥のなかで、孤島のように泛うかびあがってしまうのだ。

都市中の孤島——私は、当然読者諸君が睜みはるであろう不審の眼を予想して、次のその実在を掲げることにする。

諸君は、荒川放水路をくだって行つた海沿いの一角に、以前から、「洲蘆すあしの居留地」と呼ばれる、出島があるのを御存知であろう。そこは、杭くいが多く海流が狭められて、漕ぐにも繋ぐにもはなはだ危険な場所である。水は、はげしく奔騰して、石垣に逆巻き、わずか、西よりの一角以外には、船着場所もない。

それに、じめじめと暮れる西風の日には、塵埃ごみや焼却場やきばの煙が、

低く地を掃いて匂いの幕のように鎖してしまふ。また、島の所々には小沼のような溜りがあつて、そこには昔ながらの、蘆の群生が見られるのである。そのそよぎ、群れつどう川かわ鶺鴒の群が、この出島の色に音に荒涼さを語る風物なのであつた。

そこで起る当然の疑問は、都心に近いこの港の口に、なぜ、こゝも荒れ寂びれた出島があるかということである。

けれども、この「洲蘆の出島」は、もともと仏蘭西フランス大使館の鴨猟地なのであつた。現在も、以前の猟館には司厨長しちゆうが住んでいて、他には、自転車の六日競争の小屋があるくらいである。

おまけに、その二、三の棟が疎まばらに点在していて、もしも秋の日暮に、私たちがこの島を訪うたとして、海風に騒ぐ茫漠たる枯か

れすげ

菅の原を行くとしたら、その風雨に荒れ、繕うこともない石壁の色は、もはやとうていこの世のものとは見えぬであろう。背後の檣も、前にある煙突の林立も、およそ文化といい機械という雑色のなかにあつてさえも、この沈鬱の気を和らげるものではない。ところが、四十町七丁目側の石崖が崩壊して、折角あつた、ただ一つの木橋が役立たなくなつてしまつた。

それからはこの島に——といつても、当分のあいだではあるが——埋立地から出る、渡船で聯絡するようになった。そうして、東京という大都市のなかに、見るも黄昏れたたそがような孤島が作られることになつたのである。

さて私は、その出島に起つた、世にも凄惨な人間記録を綴ろう

とするのであるが、それは、鵜の羽音でも波浪の響でもなく、陰々と、地下にすだく地蟲の声なのであった。

その夜、洲蘆の出島を、最後の渡船が出たのは、十時過ぎであった。

この数日來の降り続きで、いまも、心の底に浸みとおるような霧雨が降っている。渡船には、頭巾を冠った巡査が一人だけ乗っていて、寒さに手足をすぼめ、曳ひきふね船の掻き立てるすすまじい泡を眺めていた。

出島には、もう一点の灯りも見えない。

多くの船体が、雨脚のなかに重なり合つて暈ぼかされている。

すると、その巡査が、なにを見たのかいきなり舳みよしに屈かがみかかつ

た。

「あつ、人間だ!」

見ると泡の薄れた、船脚の底からスウツと影を引いて、淡い、  
どうやら人ひと容がたらしいものが現われてきた。

が、すぐにそれが、気の迷いでもあったかのように、ふたたび  
泡立ちはじめた河面のなかに隠れてしまったのである。すると次  
の瞬間、巡查の、心も眼も凍らせるような、怖ろしいものが現わ  
れてきた。

激しく湧き立つ真白な泡のなかに、なにか水底からもくもくと  
吹き出てきたものがあつた。その、黒い油のように見えるものは、  
間もなく泡のなかで、不思議な模様を刻みはじめた。それが扇おうぎ



形がたに拡がったり、泡が打衝ぶつかつて、白い皮膚のようにスウツと滑らかなになると、縞に曲線に、乱れ入り組んで、慄ぞつとするような交錯が起り、また砕け散って、鱗を撒まいたような微塵模様となるうちに、今度は……細長い指のようなものが、暈ぼつと光って白く……泡の外へ行列蛆うじのように消えてゆくのだった。

その、のろのろと連なつてゆく薄気味悪さには、巡査も思わず顔をそむけた。

舟は、まだ中流にある。

ただ一つの街灯の光が、向うの河岸縁かしべりを赭あかく染めているだけだ。

「いまのは、指じゃないかしら……」

やがて、巡査の眼には、なにものも映らなくなっていました。

ただ聴えるのは、轟々ごうごうと水を捲き返す、推進機スクリューの音だけであつた。

すると、湧いては流れ、解けては結ばれる激流のなかに、茫ぼうつと光る、白いうねりのようなものが現われた。その光りは、泡の谷を染め、闇空を映す峯を曇らせて、パツパと閃ひらめきながら、八方へと衝つき拡がってゆく。

人の形というものには、一種云うに云われぬ不思議な力がある。どんな闇のなかでも、どこからか、光をとってきて、形を現わすものだ。巡査は曳船に向つて、たまらなくなつたような叫び声をあげた。

「オーイ、舟を停めろ、水死人だぞ、停めろ、聴えないか、オー

イ、停めんかと云うに……」

しかし、それは風の音、機<sup>エンジン</sup>関の響に消されて聴えなかった。

と、続いてそこには、まさに、見る眼を覆わしめるような、およそ現実の怪奇としては極端かとも思われる——それは、血を与え肉を授けた地獄絵の様<sup>さま</sup>なのであった。

水は、涯<sup>らせん</sup>のない螺旋のように逆巻いて、その、顔もさだかでない、屍体を弄びはじめた。もくもくと湧き出す血が、海藻のような帯を引き、ちらりと緑色に髪の毛のようなものが見えたかと思うと、屍体は、激しいうねりを立てて水底に沈んでゆく。

すると血の帯に、見るも悽惨な渦が捲き起って、いくつとなく真赤な螺旋のようなものが直立してゆくのだ。

それは、血の怖れというよりも、むしろ慄ぞつとするような美しさで、ちりちり尾を捲く暗緋あんひの糸のようなものが、下へゆくほど太まり溶け拡がっていて、ちようどそれは、触手を上向けた紅べにく水母くらげのようであつた。

が、やがて眼前には、ひらひら悪夢のなかで蠢うごめく水母の手の代りに、今度は胃も食道も、グイと逆さにしごかれるような感覚が起つた。

それは、底のほうから、もくもくと噴油のような血が湧き出たと見る間に、その層が、水面に高くぐいと盛りあがつたように感ぜられると、そこを、紗うすぎぬのような横波が、サツと掃いた。すると紅の暗さに、一いちまつ抹の明るみが差したかのように、血の流れた

下から、見るも鮮やかな淡紅色とときをしたものが現われたのである。

それは、円い、樹肉の断面のようなもので、中央には白い筒のような芯があり、ところどころに、なにか汚ないながらも触りたくなるようなひらひらが動いている。

「アツ、推進機スクリュウで、首が截られた……」

すると船底を、鈍くゴツンゴツンと突きながら遠のいてゆくものがあった、その響きが、靴の底からズウンと浸み渡ったとき、巡査はもう何事も分らなくなってしまうた。が、やがて気がつく、舟は舳へさきをケリケリと当てながら、対岸の渡船場わたしばに着いたのであった。

「君、あれほど呼んだのに、なぜ聴えんふりをするのだ」

巡査は棧橋に飛びあがると、曳舟の船員を怒鳴りつけたが、その声も、風に消されて相手には届かなかつた。

湖水のように見える、たたき混泥土の舟待ちには、街灯が一つ長い影を引いている。

しかし船員は、ともづな纜を捲きながら、暗い水のうえを覗き込んで、「ああ旦那、お客様ですぜ。舟も終発なら、この仏様にも返り車がねえときた。ひでえこんだ、こりや、スクリュー推進機にやられたらしいな」

ギラつく脂のなかで、そのあぶら全まるはだか裸の屍体が男であると分つた。首はなく、スクリュー推進機の打ち込んだ、無数の切り傷が全身にわたつて印されていた。やがて、肩口に縄をつけて、舟待ちに引きあげ

た。

下腹は、わけてもパツクと口を開けていて、そこから、淡い藤色をした小腸の端がのぞいている。

船員は、群れてくる船蟲を、揮発油で防ぎながら、

「ねえ旦那、こりや他殺でしょうかねえ。きょう日は、裸で涼むような、時候でもねえんだし……」

「サア、そりや、どうとも分らんよ」

その若い巡査は、雨沫しづきを浴びて、黙然と腕組みをしている。

「とにかく、検屍をうけなきアならん。君、帰ってせつかく休みたいところを気の毒だが……」

するとその時、足を小流れのなかに突つこんだまま、凝じつとそ

の様子を見ている男があつた。それは、遠くから見たら、幽霊かとも思われるような、影を、流れにちらつく街灯の灯のなかに倒している。

「オーイ船頭、いや船長、ふ、船を出してくれ」

その、死んだように酔つ払つた、外套のない男は、足を流れにとられながら、船員の側に歩み寄つて来た。

「出せ、船を出せ」

「冗談じゃないよ、時間切れだぜ。これでも、東京市橋梁課の渡船なんだ。お役所仕事だぜ。銭ぜにをとる渡しと、ちつたアわけがちがうんだ」

「頼む、今夜は洲蘆の出島に、ぜひにももの用があるんだ。ねえ君、



判任官閣下、頼むから君、かけ合つてくれ給えな」

が、間もなくその男の眼は、巡査にも船員にも向けられていなかった。まるで、悲しむような、それでいて、異常な興味をたたえている、抉るえぐような視線を、船待ちの屍体のうえに注いでいるのだった。

「どうだ判任官閣下、君はこの屍体が、他殺か自殺か判明せんと云つたね。君、この屍体の胃袋を、押してみたらどうだね。ハハハハそれで分つたら、御褒美に洋行のことをかけ合つてくれ給え」

巡査の頭巾の蔭には、その四十男を見る不審そうな眼が瞬またたいている。垢染あかみた、硬い無精髭が顔中を覆い包んでいるが、鼻筋の

正しい、どこか憔悴やつれたような中にも、凜りんとした気魄きはくが仄ほの見えて  
いるのだ。

「そうか、それでも足りなきア、船賃に追い付くまで、もう少し  
弁じようか。そこで、下腹の傷だがねえ。見給え、それだけが—  
—なに、推進スクリュウ機でやられたように真直だと。それだから、君は  
まだまだ講習が足らんといいのだ。だいたい人間の、自然の手の  
運動というやつは、曲線なんだ。対象を見ないでいて——つまり  
例を引けば、盲人めくらの手の運動だが——けっして、正しい直線を自  
然に描けるものじゃない。ところがこの屍体には、それが逆の論  
理になっている。背後から抱えられて、グサリと突き立てられた  
とき、屍体には、屈かがむのと、伸びる反射運動とが連続して起るの

だ。だから創きずの歪よこしまみが、その屈伸に符合する。正数プラスが負数マイナスに化ける。二段に起る、曲線が直線に是正されてしまうんだ。ハハハハ、分ったかね。それにこいつあ、創の浅まり方から考えても、明白に左利きだ。ねえ判任官閣下、この屍体の犯人は左利きなんだぜ」

途端に、巡查の眼からは光りが消え、彼は阿呆のようにぼかんと立ち竦すくんだ。

その憔悴したさま、滴のしたたる蓬よもぎのような髪かみの毛、それを仄ほめぐつて、陰火のような茫々としたものが燃えあがっている。

この男には、自然としか見えぬものでさえも、矯ため直す不思議な魔力があるのだ。と、巡查には、なにか人間放れのした神秘的

なものを見るように、この男が薄気味悪くなってきた。

すると、その男の顔に、巫山戯ふざけたような笑いの皺が打ちはじめ  
て、

「ハハハハ、まだ合点がいかんのかね。左利き——それが、ギリ  
ギリ結着ほしというところだ。早く犯人を挙げて、暮にはたんまりと  
暖まるさ」

そう云つて、たばこ 莨を取り出し、マッチ 燐寸を摺つたその手を見たとき、  
巡査は頭から水を浴びせられたような気がした。

この男が、左利きではないか。

あか 緒く、マッチ 燐寸の灯影にちらつく、刻みあげたような陰影——それ  
を、怖れるかのようにまじまじと見詰めながら、巡査の鼓動がド

ド、ドドつと走りはじめたのである。そうして、細かい雨と冷たい闇とを挟んで、二人の間には息詰るような沈黙が流れていった。すると、背後にあしおと蹠音がして、ひとりの警部補がヌウつと顔を突き出した。

「君、どこかに首なしが、上がったと云うじやないか」

ところが、その警部補は不思議なことにも、男の横顔に、凝じつと視線を据えたまま動かない。その顔には、なかば驚きを交えた、複雑な色が掠めてゆく。そうして、なにやらもそもそと語り合っていたが、やがて船員に、もう一度発船するように命じた。

「有難い、助かった。君は、なるほど話が分るよ。オイ、東京市橋梁課のお役人、ふ、舟を出せ」

その男は、再びもとの酔いどれ口調に返つて、襟えりを立てながら渡舟わたしのなかに蹠よろめぎ込んだ。巡査は、なにか得体の知れない魔性の霧に包まれたような気がして、しかし、屍体はあるぞとまた現実に戻るのであつた。

水量みづかさの増した、河面をゆるく推進機スクリューが掻きはじめ、この神秘の男を乗せた、船尾灯が遠く雨脚のなかに消えてゆくのだつた。「江藤警部補、これはいつたい、どうしたということなんです。

貴方あなたは、あの不審な男を渡船わたしに乗せてしまつて……」

その若い巡査は、やっと夢から醒めたように、警部補になじりかかった。しかし江藤警部補は、いきまく部下を、優しく宥なだめるように見て、

「なるほど、事情を知らん君は、そう思うだろうがね。いまの男を、君は誰だと思う。知っておるじゃろう——つい四、五年まえ、主任検事級で鳴らした左枝八郎さえという方を……」

「ああ、左枝八郎……」

しかし巡査にとると、いまの男が左枝八郎であるということとは、むしろ無名氏で置くよりも、いつそう不可解なことだった。

「だが、どうにもそれは信じられませんよ。あの変りかたは、いったいなんということですか。左枝八郎ともあろう人が、『欧航組』の、組織を木葉微塵こつぱみじんに叩き潰かたした方が、なんという……」

「そうだ、あの方があなるについては、いまの、『欧航組』の大検挙に原因があった。——それでと云うても勤務中だが、君に

警察医が来るまで、かいつまんで話してあげよう」

それから、本庁への報告、水上署への手配が終ると、二人は並んで舟待の腰掛に腰を下した。風が凧ないで、波に隠れていた、渡わ船たしの灯がまた現われた。

「その、『欧航組』というやつは、君も知つとるであろうが、以前船員だった連中が企んだ、大仕掛な密輸団だった。おまけに、港々には、春婦宿を経営していたし、大規模な、世界を股にかけて、人肉買売までもやっておった。ところで、その組織を云うと、四人の秘密組合になっておつてな。そのなかで、高こう坂さか三さん伝でんというのが、マア首領株で、他にはたしか——それが、三、四、五と順になるような名前じゃったと思うたが——それぞれ船場せんば四郎



太、それから矢伏<sup>やぶせ</sup>五太夫、もう一人は、ちよつと度忘れしたが、  
そうだった、成戸<sup>なりと</sup>六松というその四人じやつたと思うたよ。とこ  
ろが、しまいには、仲間割れをしておつてな。なにしろ、その三伝  
という男が、冷血なことこの上なしという辣腕<sup>らつわんか</sup>家だったで、自  
然独裁の形にもなるし、他の三人も、自衛上三伝と対立するよう  
になった。つまりが、勢力争いじや。そうして、感情やら、利害  
の衝突やらがつのりきつた結果が、誰も知るとおり三伝の死とい  
うことで終つたのだよ。それも、一味が検挙されてから、はじめ  
て分つたことで、三伝は横浜の事務所で、矢伏五太夫のために心  
臓を狙い撃ちにされた。屍体はそのまま、窓から海に落ちて分ら  
ずじまいになつてしまつたが、いや三伝の死は、無類この上なし

という確実なんじゃ。まさか、射ちはしまいと、軽く考えていたのじゃろう。三伝はせせら笑つて、弾莢までも調べさせ、サア射てとばかりに、麗々しく胸をはだけたそうだ」

「なるほど、度胸も相当だし……芝居気たつぷりな奴ですね」

「なにしろ、鬼も怖れるという、仏領カレドニアのアンチモー鉱夫を志願したほどで、それから欧州各地を流れ歩いていたのじゃから、腕も度胸も、三伝だけはまったく群を抜いておつたよ。ところが、多寡<sup>たか</sup>をくくつて、よもやと思つていたやつを、矢伏が狙いを定めて、ドカンとやってしもうた。三伝は、あつと叫んで心臓を押えたなり、窓から海中に転げ落ちてしまったのだ。ところ  
が、さて検挙してみると、三伝が保管していた、一味の利得金の

所在が分らない。だが、それはまだまだ、手軽な方でな、後で曝け出された事実というのが、比べもつかんほど奇怪なことじやつた。矢伏に、死刑が執行されてから、ちよつと後の話で、意外にも、保釈中の船場四郎太が拳銃で自殺を遂げてしもうた。

——犯人は俺おれじやという、遺書を残してな」

三伝、四郎太、五太夫、六松と、偶然にも三・四・五と揃った「欧航組」の幹部が、ひとり仲間仲間に殺され、ひとりは死刑になり、もう一人は、遺書に告白を記して自殺を遂げてしまった。

そうして、残る成戸六松の一人だけが、四年の刑期を豊多摩刑務所で送っているのである。「欧航組」は、こうして壊滅した。けれども、その終しゆうえん焉んを、いと朦朧もうろうとさせているのは、一つ

の殺人に、下手人が二人現われたということである。生憎、屍あいにく体は海中に落ちて、発見されなかつたのであるから、三伝が、二つの弾のどっちの方をうけたのか、また、その二つが二つともという場合もあるだろうし、もし屍体があがれば、体位からでも推定できることであるが、いまはその証明が全然不可能になつてしまつた。が、一方に、また船場の遺書を見ると、その疑問を、やや解き得たかのような気もするのだつた。

「そこで、遺書の内容を云うと、たぶんこんなことが書いてあつたと思うよ。矢伏の手が顫ふるえ、腕にも安定がない。たぶん弾は、肩を掠めて後方に飛ぶであろうから、自分が彼に代つて狙撃をした。それは、ほとんど矢伏の発射と同時にあつて、居合せたのも、

私が狙撃をしたことを知らなかったようである。というんだが、わしはなるほどと思った。要するに、問題は撃ち手の腕にあるのだからな」

屍体の菰こもに船蟲がざわざわめく音が、この奇怪な話にいつそうの凄気を添えた。しかし、若い巡査は、眼を眩まぶしそうに瞬またたいて、

「ですが、居合せたもののなかで、誰かその辺の機微を、知っている者はなかったのでしょうか」

「ところが君、耳というやつはじゃよ。両側で、同時に非常な高い音を出された場合、その人間には、音の見当というのがてんで付かなくなってしまうそうだよ。そのことは、居合せた証人で、

抱え淫売婦のお悦という女が証言しておる。それに、船場の女中の話によると、その遺書は、わずか五、六分の間したたに認められたのだし、むろん、筆跡には寸分の相違もないし、そういう事で、左枝検事はポンと辞表を投げ出してしもうた」

「自分が起訴をして、死刑になった男が、無罪という……。そりや、左枝検事でなくても、たまらないでしょうからね」

「それで、職を退ひいた後の左枝検事は、自暴自棄という有様で、奥様には去られるし、もともと資産というほどのものもないし、今では、どうして暮しておられるのか、まったく沙汰の限りじやよ。ああ、憔悴やつれ果て、うらぶれた姿を見たら、誰が、法衣に包まれた昔の検事を思うじやろうか。だが儂わしには、そういう気持が、

てんで分らんがねえ。自分の起訴が正しかったか正しくなかつたかつて。ハハハハ、あの御仁ごじんは哲学者じゃよ」

そう云つて警部補は、さも自分には、左枝の辞職が腑ふに落ちぬといったような素振りを見せた。しかし、若い巡査には、左枝の苦悶くもんも、呵責かしゃくにひしめくような有様も、しかもそうしていながら、なにかを凝然じじつと見詰めているような気がしてならなかつた。

「私は左枝検事に、なにかあの方だけが疑問に思っていることがあるのじゃないかと思えますよ。人間の力では、とうてい割り切れない問題を、あの方だけは、御自身でやり遂げようとなさっているのではないでしょうか。それに……」

と云いかけて、巡査はハツとしたように口を噤つぶんだ。二人の間

には、時代の隔たりがある。まして、上司である警部補にそれを云うということは、今の身分として、はなはだ当を得たことではない。彼は、左枝八郎の姿に、悲劇的なものを感じながら、それから黙々と考えはじめたのである。

われわれは、常に過失<sup>あやまち</sup>を犯している。

しかし、検事の起訴理由には、寸毫<sup>すんごう</sup>の謬<sup>あやま</sup>りもないのである。

船場四郎太が、遺書に告白を残して死んでいったということも、人であり、神でないかぎりには窺うことさえ出来るものではない。

まして、矢伏の犯行には、自白を伴っている。いわば、それは確実以上の事実である。それを一瞬の間に、覆<sup>くつがえ</sup>してしまふような、怖ろしい力が現われたとき、人は不可抗とだけで、悔いの欠片<sup>かけら</sup>も



残さずケロリと断念あきらめてしまうものである。

人間は、自分の力の限りというものを知っている。

けれども、稀に出る、高い稟ひんせい性を持つ人物というものは、よ

く自分を、人間以上のとんでもない位置に置きたがるものだ。検事の苦悶も、呵責も、実にそこから発はしているのではないか。彼はいま、不可抗と闘いながら、路傍を彷徨さまよっている。人が裁くか、

神が裁かれるか——それこそ、人間の一番な壮烈な姿であろう。

と、やがて若い巡查には、ひしと胸を打つ、ひたむきなものが感ぜられてきた。ところが、ちようどその頃、左枝八郎を送り届けた洲蘆の出島には、陰々と闇にひしめく悲劇の兆しが濃くなつていったのである。

## 二、定期風に乗る男

その、出島にある獵館には、フランス仏蘭西大使館の司厨長中村銀次郎が住んでいた。と云うよりも、ただ台帳にある、名のみというのを便宜にして、こつそり彼はまた貸しをしているのだった。そしてそこには、三伝の妻お勢せいが住んでいて、秘かに営んでいる春婦宿になっていた。

そのお勢という女は五十に近く、三伝とともに、永らく歐洲各地を放浪した札付きであるが、三伝の変死当時はシャンハイ上海ハイにいて、しかも多情、その三伝の死も、暗に糸を引いてお勢が三人を踊ら

せたのではないかと云われている。

大戦当時、伯耳義ベルギーで独逸兵ドイツの輪姦をうけた彼女は、脊髄に変化が起つて、歩くのにも異様なガニ股である。しかも、齒がないせいか、顔が奇妙な提ちようちん灯ちんのような伸縮をして、なんとも云えぬ斑点のような浸染しみのようなもので埋まっている。

それは、驅讎くばいに使つた水銀のせいとも云えるが、またこの顔は、永い醜行と悪行との現われのようにも考えられるのだつた。

左枝八郎は、いま枯菅を踏みながらこの獵館へと歩んでゆく。

しかし読者諸君は、自分が剔てつけつ抉けつし撲滅したこの一団に、なぜいま、左枝が訪れようとするのか疑念を持たれるだろう。けれども左枝八郎とこの一味との間には、とうに、それまでに異様な繋

がりが出来ていたのである。

その、そもその始まりというのが、今年になつてから最初の雪の夜のことだった。左枝はただ引かれるもののように、洗足せんぞくの五太夫の家を訪れた。

当時矢伏は、すでに刑死台にのぼつていて、遺族としては早苗さなえという一人娘がいるだけであつた。

その早苗は、どこか神経的な凝視的な影のある娘で、美しくはないが、清麗さにかけては万人に優るものがあつた。

「ああ、また家宅搜索でございますの」

早苗は左枝を見ると、冷やかにそう云つたが、彼女にとって、実に出来ることなら飛び退のきたいようなこの男が、どうしたこと

だろう唾つばのように口を噤つぐんでいるのだ。顔には、悲痛の色が漲り、咽喉のどは撚よれ合う縄のような筋が張っている。

時が流れる、彼は唇を開こうとはしない。

窓をサラサラと粉雪が掠かすめ、早苗は、この沈黙がやがて薄気味悪くなってきた。

「なんでごぎいますか、もしなんぞ、御用件があたりでしたら」  
「実は」

と云って、左枝は重たそうに口を開いた。額には、はぜた粟粒のような汗うかが泛うかんでいる。

「今夜お訪ねをしたわけは、貴女あなたなら僕をお救け下さるだろうと思つたからです」

「な、なにをおっしやるのです」

この思わぬ言葉に、早苗は、相手の眼のなかを窺うように、覗き込んだ——ひよつとすると、この男は狂きちがい人になったのじやないかしら。

「貴女が、僕をどう思っついていらっしやるか……。僕は、貴女のお父さんを起訴して、絞首台に送りました。しかし後で、その事実が、間違っていることが分りました。貴女はお父さんが、理由のない首を絞められたのを御存知でしょう」

「いいえ、そのことについては、私、少しもお怨みはしておりませんの、何事も、運命さだめですわ。それに、父の方だって、私の知らない間に、大変悪いことをして……」

「では、僕が控訴したのをお忘れになったのですね。それがあつたばかりに、一審の有期刑が、どうなったと思います？　もし僕が、お父さんにそのままの服役を許したとしたら、船場四郎太の告白で、殺人の罪が消えてしまったことになるのです。御覧なさい、この手です。この手が、むぎとせつかくの機会を<sup>もぎ</sup>取り取つてしまつたのです」

すると早苗の顔に、サツと血の気が上つた。

いまの一言で、彼女は水を吹きかけられたような気がした。

けれども、なによりいっこうに解<sup>げ</sup>せないのは、この男が、憎め憎めと云うように<sup>そそ</sup>唆りたてる態度だつた。

「貴女が、どこにこの不幸の根があるか——知らぬはずはないと

思いますね。いぎ、死なれてみると、貴女は蓄財のないことがお分りになったでしょう。どうしたら、これからやってゆけるのか——それなのに、自分をどん底に突き入れた男の顔を見ていても、唾つば一つ吐きかけるでもない……」

そうして女の顔に、憎悪の色がようやく灰見ほのえてきたとき、意外にも、男は張りの弛んだような吐息を洩らすのだった。

彼は、職を退ひいてからも、どうしたら、心の亀裂を埋めることが出来るかと考えていた。

自分はいま、一つの罪を感じて自分の魂を苦しめている。理由いわれのない、良心の呵責かしゃくに悩み疲れている。理由はない、まさに確然と理由はない、それであるのに……。どうして、懲罰とか贖しよく



罪ざいとかいう意識がさき走ってくるのだろう。

それが左枝八郎の、どこか頭の隅に棲んでいる、地蟲のようなものだった。いわばそれは、水に姿を映してそれに恋をする、ナルシサスの理想の我であつた。そうして彼が、絶えずその強い衝動と闘っているうちに、いつの間にか、自分を虐しいげることいたに異常な興味を覚えてきた。

卑屈になる、貧乏になる、人に蔑まれる——自分を狂気から救つてくれる道が、ただそれだけのように思われてきた。

「あれからの僕も、そりや惨めでしたよ。したい三さん昧まいな事をし  
て、わずかあつた、金になるものもことごとく失いましたし、しまいには、家内の着物までも裸かにして——その時、僕は独りぽ

つちになつてしまつたのです」

それを聴いているうちに、早苗の表情がだんだんに硬くなつていった。彼女は、眼を棧の雪に据えて、凝じつと考えていたが、一度はうるんだ瞼も、やがて涸から々々になつた。

搔き立てられた憎悪に身を切るような思いを耐こらえても、早苗は、もうこの男を容赦しないぞと心に決めた。

彼女は、絶望のなかでもそれだけが、はつきりと光明であるのを知つた。自分の肉体を投げ出して、この男を墮ち切るまで墮落させるのだ。無頼な、恥も矜きようじ持もうけつけない、腐敗したような性格を作り、しまいには、この男に犯罪までも犯させると――早苗は、父の幻と重ねるようになつて、今が、遁のがしてはならぬ復讐

の時機だと考えた。

「でも、そんなことより、貴方には復職のことが大切じゃございませんの。四郎太の遺書が、もしかして偽造とでもなったら、その悪い夢もきつと消えてしまうと思えますわ」

「ああ、あの遺書がですか、だが僕には、遺書よりも、もっと大切なことがあるのです。それは、船場という男ですが、あの人間には、悔悟とか自殺とかいう性格は、微塵もありませんからね」

左枝の眼が、ほんのりと輝きを帯びてきた。

それが、まるで二重人格のように、それまでの彼にはけっして見られなかった、一種異様な鋒<sup>ほうぼう</sup>鉞<sup>ひらめ</sup>の閃きなのであった。

法庭に天降<sup>あまくだ</sup>ってくる、神の光のように、人の運命を秤るとき

のあの<sup>おもかげ</sup>倂が……。けれども、それは間もなく消えて、左枝の身体には、<sup>けいれん</sup>痙攣のようなものが起つてきた。

「それに、僕は卑しいでしょう。あれから賭博もしましたしね。ところが今夜は、それ、こんな風に勝つてしまつて……。だが僕は、しかし、一文なしです。これから帰るには、貴女に御拝借をしないと……」

この、例えようもない、<sup>げ</sup>解しようもない矛盾に、早苗もしばらく眼を<sup>みは</sup>睜つて男の顔を見詰めていたが、やがて左枝は、取り出した札束にアツという間もなく火をつけた。

焰が消えると、そのうえをグイと踏みつけて、

「ねえ、どうかお願いです。僕に、帰るだけの金を、貸しちやい

ただけませんか。投げて下さい。床に、乞食に投げるように、チヤリンと音をさせて下さい」

そうして、呆氣にとられた早苗の手から、二、三枚の銀貨を握ったとき、左枝は突然、あたま脳に灼熱するようなものを感じた。

一瞬の間に、苦悶も不安も何処いずこへか飛び去ってしまった、ただ漲みなぎるのは、それまで知らなかった異常な活力だけであつた。

しかも、激しく押し迫る破倫な衝動のために、いきなり彼は、早苗の手を捉えてグイと引き寄せた。ところが、早苗は振り解ほどこうともせず、まるで、寝た振りをした子供のように抱きすくめられた。唇の端には、無恥な、挑むすような、狡ずるそうなものが、そして、眼には、湿しっけた、暗い水の粒が宿っている。左枝は、いった

んは感じた女の顫えが、やがて、消えてグツタリとなったのを知った。

翌朝左枝は、全身が粉々になったような思いで、起き上がった。同じ布団、同じ搔卷かいまきにくるまって……電燈は消え、窓は雪明りでほんのりと明るかった。

しかし、不思議な一夜が明けると、一人は憎悪のために、一人は、愛すでもない異常な目的のために離れられなくなった。

早苗は間もなく、生計のために三伝の妻を訪れて、その、出島にある春婦宿で働くことになった。前検事左枝はそうして、早苗が身を削る、いくばくかの金で養われることになったのである。

彼女からは、絶えず鞭のように、憎悪と蔑視とが飛んでくる。

出島の一味からは、かつて鉄槌てつづいを下したその人の末路かと嘲あざけられる。けれども、もしそれが仮りになかった時のことを考えると、おそらく左枝は、あの衝動と闘うために、気が狂ったのではないだろうか。

左枝はいま、雨沫しづみぎを浴び、微かに洩れる猟館の燈を目指して歩んでゆく。と、ちょうどその頃、お悦ねえという姐さん株の一人が、早苗と湯気に煙る窓越しの雨を眺めていた。

「ねえ、この淋しさったら、お話しじやないじやないの。橋が落ちて、渡船わたしが出来てからは、なんだか、人別にんべつを見られるようで気が引けるって、客足は落ちるし、こんな雨の日なんかは、三伝さん御全盛の、あの頃を想い出すよ」

その、坂東お悦という古顔の女は、これまで三伝のもとを一日も離れたことはなかった。丈が低くて、まん丸こくつて、太い咽喉がいつもベトリと汗ばんでいる。そのくせ、齡の割に皮膚が艶々しく、どこか娼婦というよりも喰物の感じが強い女だった。嘘吐きで、お人好しで、人に瞞されやすく、自分の行為に、善悪の識別というものを持たない。彼女は、恩顧をうけた三伝を裏切つて、彼が来たことを他の三人に内通したのであつたが、その後は、まるで何事もなかつたかのように、お悦はケロリとしていたのだ。

「当時『船』と云や、もぐりの遊び場の中で、歴としたものだつたよ。いまと違って、組が二つほどあつてね。『ホワイト・スター・ラ白星組



イン  
』に『青いリボン組』という、女にだつても、やれ『金  
デン・アロウ  
の 矢』とか『銀の翼』とか、いちいちそれは穿<sup>うが</sup>つた、  
船の名前がつけられていたんだよ。それに、お前さんのようなの  
を小蒸<sup>こじょうき</sup>気と云つてね。『水精<sup>キヨール・ド・シレーヌ</sup>の蕊』なんて源<sup>げん</sup>氏名<sup>じな</sup>があ  
つたものねえ」

「じゃ、そのとき姐<sup>ねえ</sup>さんは、なんとという名だつたの」

「私かえ、私は、『ジェネラル・ブーランジエ<sup>ジェネラル・ブーランジエ</sup>將軍』号さ」

そう云つて、しばらく咽喉の奥でクツクと含み笑いをしていた  
が、お悦は、急に何事か思い出したとみえて、

「どう早苗ちゃん、成戸はまだ帰つて来ない。淋しいの、お茶引  
きだのといったところで、こんな渡世も、もう今夜限りだものね

え。私だって、きょうという日を、どれほど今まで待ち焦がれていたか知れないんだよ。誰が、好き好んでやつてるわけじゃあるまいし、出来るものなら、さっさと足を洗いたいじゃないか」

それは、ひとりお悦ばかりでなく、その日が来ることは、一味にも再生を意味するのだった。

と云うのは、大検拳の際、所在不明を伝えられた利得金が戻ってくるのであって、それは三伝が、ある銀行に変名で預け入れてあったのである。それを、一味三人が、とうとう秘し了せてしまったのであって、昨夜成戸六松が、ひさびさで娑婆しやばの土を踏み、いよいよその金が、四年ぶりで陽の目を見る。

今夜は、温かい、黄金こがねの雨が降るであろう——お悦の二重顎が

ぶるると顫ふるえたが、早苗は、それを聴くと陰気そうな顔で黙ってしまった。

「私はね、分けて貰った金で小商売こあきなでもしたいし、当分は身体の方も労いたわろうと思うの。それよりね、そんな事が、いつまで続くとは考えていないさ。第一、私の身体には、稼がないと脂肪がついてくるんだものねえ。オヤ早苗ちゃん、そんな陰気な顔をして、どうしたっていうんだい」

お悦は、早苗の顔をしげしげと見入っていたが、いきなり吸いかけたたばこ莖たばこをポンと捨てて、

「お止し、いい加減におしなよ。お前さんの執念深さにも、つくづく呆れがきたよ。お前さんが、あの人を墮落させて、そのうえ、

罪でも犯させて嗤わらつてやろうという魂胆こんたんは、そりやお父とつつあんのことを考えりや、けつして無理とはいわないよ。だけどさ、そんな事になつたら、第一、お前さん自身が片なしになつてしまふじゃないか。ねえ、少しは自分の胸にも、聴いてみるもんだよ。早苗ちゃん、どう、これが私の邪推かしらん。お前さんは、この頃變つてきちやいないかい。もうあの人を、憎んでばかりいるんじゃないだろうね」

云われて、早苗が狼狽の色を隠せなかつたほど、お悦は彼女の心の核心を突いたのだった。

異常な関心を、一人の男に持ちつづけしてきたことが、今になつてみると、ただ膠着という結果よりほかにないのだった。最初抱

いていた、あの熾烈しれつな憎悪も、近頃ではどうやら惹き合うものが現われてきて、早苗は、愛憎並存の異様な心理に悩むようになってきた。

しかし、お悦の言葉には、強く頭かぶりを振ったのである。

「なにを云うのかと思っていたら、姐ねえさんも、案外心理学者ね。だけど、私の気持おんなじよ。たとい、お金を貰ったにしろ、この稼業は当分続けてゆこうと思うの」

「マア、呆れたよ。すると、お前さんのような人間が、ほんとうの淫売婦じごくなんだね。お金を持っていて、どうやら暮してゆけるくせに、それでいて、男を道楽したいというのが、ほんとうのお女郎なんだよ。それじゃ、私から相談があるんだけど……」

とお悦の唇が、いきなり濡れてきて、眼に肢体に、開けつ放しの淫らがましいものが輝きはじめた。

「それは、ほかでもないんだが、もし、その早苗ちゃん心が、変つていないんだつたら、いいじゃないか、最後の晩だからさ、今夜だけあの人を私に貸してもらえない？」

早苗はその時、お悦の糸切り歯が怖ろしく思われたほど、彼女は退<sup>の</sup>つ引きならぬ土壇場に立たされてしまった。

しばらく彼女は、瞳を定めて凝<sup>じ</sup>つと考えていたが、みるみる、顔が縄のように引き緊まってゆく。切迫した、喘<sup>あえ</sup>ぐような、内心でなにかと闘っているような表情をしていたが、やがて、笑いの消えた顔を、懶<sup>だる</sup>そうに縦に振った。

「そうかい、済まないねえ。私だって、あの前検事殿には、満更でもなかつたんだから。それはそうと、お女将かみさんの許とこから、稲野谷なのやというあの情夫いろ、帰つただらうか」

その稲野谷という男は、女将おかみお勢の、情夫というよりも男妾のような存在だった。ところが奇怪なことに、誰もその男の顔を、一度も見たものはなかつたのである。それに、いつも来るときは、こつそりと裏口から入つて来て、帰つてゆく後姿は一、二度見られたけれど、それがどんな顔か、誰も真実確かめたものはなかつた。

しかも、より以上奇怪なことは、その男が来るのは冬だけに限られていて、十一月から二月の末までの、一定の季節があるとい

うことである。

それで、その男が、どこかの定期的な航路通いではないか——この魔窟には、そういう噂も立てられていた。

しかし読者諸君は、その稲野谷いなのがやという一人物によつて、はじめ本篇に水勢が加わつたことを察せられるであろう。誰も顔を見てもものがない、しかも、来るのに不思議な季節がある。

「ああ、あの人なら、先刻さつき九時半頃窓越しにちらつと帰る姿を見たわ。たぶん終発の一つ手前あたりで間に合つたんじゃないかしら、アツ姐ねえさん、お女将かみさんが呼んでるわよ」

それから連れ立って、お女将の部屋に行くと、そこにはお勢と成戸六松が紙のような顔で向き合つていった。



お女将が、なにか云おうとしても、声は齒音に消されて聴えなかつた。

「お悅ちゃん、大変なことになってしまったんだよ。本当に、私たちを信用しておくれね。とても、夢でもなけりや、信じられな  
い事が起つてしまつて……。実はお前さん、先刻成戸さつきさんに、金  
を取りに行つてもらつたと、銀行じゃ、それを四年前にお渡しして  
しまつたと云うじゃないか。その渡した日というのが、三伝が死  
んでからちようど四日目のことで……。それも、受取つた当人が：  
…お、お前さん、しつかりしておくれよ……。それが、さ、三伝だ  
と云うのさ」

「え、三伝が生きていた……」

これには、さすが野放図のほうずなお悦も、愕然と色を失った。夢ではないかと身内をま探さぐっていたほど、それほど三伝の生存は信じられなかった。心臓を撃たれた——それには今でも、色や幻がはつきりと浮び上がってくる。

彼の死には、人間の生理が一変してしまわなにかぎり、どこにも、疑義の欠片かけらさえ差し挟む余地がないのである。

七日後に、蘇よみがえった基キリスト督があるというけれど、三伝のそれは：  
：幽霊か、他人の変装か、それとも彼は真実蘇ったのであろうかと、四人は、三伝の風貌を眼まのあたりに思い泛うかべるのだった。

鼻の丸い、卵なりの輪郭をした、どこか病的らしい暗黄色の、それでいて、人を食ったような三伝の顔が、いまは仄かに陰火を

めぐらす怖ろしげなものになってゆく。そうして、この室には、しんしんと犇<sup>ひし</sup>みゆくような沈黙が続いてゆく。

「あの男なら、俺らに仕返しをやりかねまいぜ。だが、あいつが生きているとは……。とにかく、ここに四人いるからなア——お女将<sup>かみ</sup>に、俺に、お悦に、それから左枝だ」

雨が小止みになって、どこかの床の下で、地蟲がじいんと鳴いている。それも、成戸の顫<sup>ふる</sup>えがやまぬ声も、三伝が、秘かに楽しんでる復讐の前味のように思われた。そこへ扉<sup>ドア</sup>が開いて、泥のように酔った、左枝八郎の姿が現われた。

「ホウ、こりやなんとしたな。一家眷<sup>けんぞく</sup>族が、残らず一堂に揃って、鉛色の顔をしておるが」

左枝の、支える側から流れてゆく、あしおと登音のみが高く、この一座はあまりにも閑ひっそりとしていた。お勢の、やもり壁虎の背のような怨み深げな顔……、成戸の、打算に長たけた白々とした眼も……苦々しく、打ぶ衝つかり合うが、言葉は出ない。

「それは、三伝がね」

お悦はいまの話も、どうやら成戸の細工のように考えているらしい。

「あたいは、何が何だかいつこうに分らないんだけど、とにかく成戸さんが、ドロドロだって云うんだからね。莫ぼ迦かにしてるじゃないの。高坂三伝が、三伝が生きてるんだって。三伝が、死んで四日目に銀行へ現われたんだとき」

「そうか、ついでに何かと思つたら、お化け話か。三伝が、三伝が現われた、死んだはずの、高坂三伝が、蘇つたときたな」

異様なリズムを帯びて、唱い廻すような左枝の聲が、ふと杜絶えたかと思うと、その、とろんとした物もの懶うそうな眼まなこに、なにやら真剣なものが輝きだしてきた。

（心臓を叩き抜かれた、墓場にいるはずの三伝が蘇つたなんて、なアるほどの貉むじなども、利得金をひとり占じめにしようとして、芝居を仕組んでいるな。だがもし、それがまっこと、真実としたらどうだろうか。三伝が生きて——もしそうだとしたら、たぶんあるにちがいない奸かん黠かつな綾あやのなかに、船場の遺書も自分の苦悶も、みな筋書のようにして織り込まれているのではないだろうか）

と、いつか彼には、莫迦げたその物語が光明になるのではないかと信じられてきた。しかし、そうして一方に理性が擡もたがつてくると、また、そう考えることが迷信のような気がしてきて、結局彼には何事も信ぜられなくなり、やはり濁った、もとのあの眼に帰ってしまったのであった。

「だが、そんな怪談ばなしよりも、僕はいま真正銘のものを見てきたんだ。それが、ここへ来る終発の渡船だったんだが、ひとり殺やられたらしい男の屍体があつてね」

と云う口の下で、お勢の顔色が紙のように変つてしまった。

「なに、男の屍体だつて。左枝さん、まさかお前さんは、冗談を云うんじゃないだろうね」

「それどころか、曳舟の推進機スクリユで、首のなくなった奴を、この眼で見えてきたんだ。下したっぱら腹を一文字にやられてね、しかも、殺や

つたそいつが、左利きときてるんだ」

「ああ、それじゃ稲野谷……」

お勢が身悶えをして、絶え入るような叫びをあげた。すると、それを聴いたとき、三人は、ハツと打ち据えられたように、顎すくを竦めるのであった。

ああ、なんとという符合か、三伝は左利きなのである。

しかも稲野谷兵助ひょうすけは、ついで先刻さつき、終発間近にこの家を去

つたわけではないか。

ここに、なかば信じられ疑われもしていたところの、三伝の生

存に、ようやく確信が植え付けられたのである。彼は、この一夜を踏み出しにして、裏切られ、死地に追い込まれた一味に、復仇を遂げようとするのではないか。それは沈黙しじまのなかを、虚空から凝じつと見詰める眼があるような気がして、なにか由々しい怖ろしいものがぞくぞくと身のうえに襲いかかってくるような感じだった。そうしてその一夜は、地蟲の声とともに、夜陰を深めてゆくのである。

ところが、それから二時間ばかり経った後に、左枝は、灼きつくような渴かわきにふと目を醒した。

さっきのあの室で、椅子に酔い潰れたような気もするが、それから何処へ運ばれたのか、いっこうに覚えがなかった。部屋は薄



暗く、水色の覆いが掛つていて、肩に腰に、妙に媚めかしい、ぬくもりが触れてくる。

ハハア、早苗の部屋だな——そう思つて、相手のくるぶしに合せて、ぐいと伸びをした時、いつもなら、胸骨の上あたりを撫でる頸筋の後れ毛が、今夜はずうつと下つて、乳辺にあるのに気がついた。

饅<sup>す</sup>えたような、髪<sup>かみのけ</sup>毛の匂いがぷうんと鼻を衝く。

お悦だ——と彼はそうと知ると同時に、なぜ自分が、ここへ運ばれてきたのか、不審に思わないわけにはゆかなかつた。

すると、その時壁一重の向うに、誰やら、コトリコトリと歩き廻るような音が聴えてきた。今夜は客もない、真暗な隣室に——

と思うと、われにもなく、三伝という異様な動悸どうきが弾はずんでくる。

しかし、なおも耳を澄すと、それは隣室ではない。この室へやの、しかも間近である。

そうして、お悦の肩越しに、寝台の床を覗き見ようとしたとき、彼はそこに見た、怖ろしい何ものかに身を竦すくませたのである。

お悦の胸には、細い機械ドリル錐ルのようなものが心臓深めに突き刺さ  
れていて、そこから、真紅の泉こんこんが滾こん々と湧き出してゆくのだっ  
た。

敷布シーツの先を伝わって、雨滴れの合間を縫って……そうしてその  
時も、地蟲しわがの唳しわがれたような声を聴いたのである。

三、影法師の鰓えら

緋の地に、源氏車を染め抜いた床着にくるまって、お悦はまるで眠っているように死んでいた。顔には、少しの苦悶の影もなく、もし、それにちよつとでも触つたら、唇が、また綻ほころびそうである。が、左枝は、腕を組んで、まじまじと考えはじめたのであつた。「床の中で、昇天してしまふなんて、いかにも此こ奴いつ、淫売らしい死に方だぞ。だが、この室にいたのは、自分よりほかにない。同じ床、同じ夜着のなかで……いかに酔つていたとはいえ、この女の死を、知らぬと云いつづけられるだろうか」

寝台の側わきには、三稜の立鏡台があり、洗滌器や、壁にはいろいろ

ろな酒を入れた、カポー・タングレー護謨製用具がいくつとなく吊してある。窓は、内側からかたく鎖されていて、扉は押しても引いても開こうとはしない。おまけに、鍵穴には鍵が突っ込まれ放しになっていて、これでは、外から鍵を動かそうとしてもとうてい無駄ではないか。ああ、この室は、密室だったのである。このままの状態では、出るも、入るも出来ないはずである。それなのに、何者かが、お悦の心臓を貫いてしまっている。

自殺ではない。

この女には、船場と同じように自殺するような性格はない、と、左枝は、知らずに重ねてゆく、たばこ莨烟のなかでまったく途方に暮れてしまった。

事実それは、もし現代いまの世に、妖術というものが実現されたときのような状態であつた。頭が重く、顛顛こめかみの辺が灼やけるように疼うずいて、左枝には、花瓶の柔皮花の匂いもいつこうに感ぜられなかつた。

が、この惨劇を、他の三人に隠しおおせることはできない。

「僕が殺した、溝どぶをきれいにした……。こんな淫売の、一人や二人がどうしたつてんだ。妙な顔をして疑っているくせに……。オイ成戸君、殺やつたのは、この僕なんだよ」

三人の顔を見て、彼は堪たまらなくなつたように、叫び立てた。六つの眼を——敵意と疑惑に燃えた、その六つの眼を見ているうちに、早苗からは最終の審判を、他の二人からは、報復の色が窺わ

れるのだった。

「そりや、分つてるさ。誰も入れないこの室のなかで、お前さんのほかには、殺せるものがないんだからね。ねえ成戸さん、いたい此奴こいつをどうしようかね」

お勢が、左枝と成戸を等分に見比べながら云うと、

「ですがねえ女将おかみ、此奴がお悦を殺した、理由が分らねえように思うんだ。云わせたら、どうでしょうね。オイ左枝、何もかも、ここで打ち明けてしまったらどうかね」

「吐くとも、腹の底まで吐いてしまうよ。そこで、まずこの機ドリ械キ錐ルだがね。君も見るとおり、一抉えぐりというにしては、少々先が鈍すぎるんだ。こんなもので、お悦の眼を醒まさずに、やり了せら

れると思うなら、それは君の方から伺いたいものだよ。ハハハハ、いくら鈍いお悦の神経だつて、これじゃ、どうやら魔睡が必要になつてくるぜ」

と、躡たじろぎはじめた成戸六松の顔を、相変らず、左枝は死んだような表情で見詰めている。鈍い、黄味がかつた盲めくら人の鞏しろめ膜めのような、しかし、ぼやついたその靄もやの奥には、いつでも踏みこらえるような不思議な力がこもっていた。

「だから、白状すると、犯人はこの僕じゃないということになるんだ。僕が、どうして殺やるもんか。君は、この女を、人世しらみの虱みを——僕が捻ひねり潰つぶしたとでも云うのかね」

「いいえ、貴方ですわ」

早苗のその声は、低いが、しかし異様な張りを帯びていた。

「ここへ連れて来られるとき、貴方あんたは前後不覚だったじゃないの。間違えて……、ほんとうに、姐ねえさんの可哀想なことだったらね。私と感違いして、顔もろくろく見ずに、貴方が殺ってしまったにちがいないわ」

「さ、早苗」

これにはさすがの左枝も、溢れてくる困惑の色を隠せなくなつてしまった。

いよいよ最後の時が来た。

この女の胸には、これ以上、めくる頁ページがなくなつてしまったわけだ。



「どう、白状したら……、でも、いい醜態ずまじゃないの。自分がさんざん、罪科つみとがもない人たちを、見下みくだしていたんだからね。その台の下へ、いまに御自分が立つんでしようからねえ」

その、怨み深げな早苗の顔が、ぐうつと迫ったように思われたとき、彼は意外にも平然たる口の利きき方をした。

「じゃ早苗、すると君は、僕がこの室を出て、お悦を射殺してからまた入って来たと言うんだね。だが、僕のどこに、そんな銃器があるだろうか。君はお悦が、どうして殺されたかも知らないでいて……」

「なに、銃器」

この、あまりにも意外な、強弁としか思われぬ言葉に、お勢も

成戸もアツと驚きの声を洩らした。

すると左枝は、右側の羽目にある、よく見ると、色が変わっている嵌め込みを指差した。そこは、よく魔窟にある、「魔鏡」に類したもので、色のよく似た、護謨板が嵌め込まれてあった。

けれども、埃の様子を見ても、最近に取りはずしたような形跡はないのである。

彼は、そこにある針先ほどの孔を示して、

「君、少々講義めくがね、これでも、前の商売のことは、いくらか憶えている。それによると、四百米メートルの速力で、厚さ五耗ミリの護謨板を射撃したとき、そこには、わずか帽子ピンほどの孔しか明かなかった。もちろん、距離に比例して穴は大きく、先端の鋭鈍い

かんにも、関係はあるがね。しかしこの機械ドリルでは、針先ほどの孔が当然だと云いたい。どうだ、君か、それとも女将おかみ、君か。まさか、早苗じゃないだろうね。消音機をかけて、角度が分つている、この胸を射抜いたのは……」

そうしてついに、お悦の死が密室の殺人ではなくなってしまうた。

それが、お勢か、成戸であろうか、早苗であろうか、——それともなると、ふたたび三伝の張る、翼のような影が下りてくるのだった。

稲野谷が殺され、それから、五時間とは経たぬ間に、今度はお悦が斃たおされた。ひとりは密通、一人は裏切り——その嗤わらいが、微

かな余韻のようなものを引き、成戸は、たまらなくなつたように地蟲のいる床のうえを踏み付けた。

それで再び、この室は死人と二人だけになつてしまつた。

「ハハハハ、莫迦め。この機械錐ドリルが発射されて、あんな小さな孔だけですむと思うか。やはりこの室は、蟻も入り込めぬ密室に變りはないのだ」

そう云つて、隠していた小刀ナイフの錐きりを、ポンと床のうえに投げ捨てたが、そうして、彼の詭策が成功したにもかかわらず、またもとの憂鬱な表情に歸つてしまふのだつた。

けれども、高坂三伝が蘇つたといふことは、これでほぼ確実にされたわけである。彼以外に、彼を除いては、密室を切り破るな

どという、離れ業が演じられようか。船場の遺書も自分の運命も——と、左枝は心に、なんとなく曙のようなものを感じてきた。姿のない、地蟲のような三伝に、彼は必死の闘いを挑む決心をしたのである。

やがて、夜が白々と明け初<sup>そ</sup>めてきた。

潮鳴りがして、雨を含んだ重たそうな雲が低く垂れこめ、霧はまだ港を鎖ぎしている。しかしその日も、迫る恐怖のうちに、やがて夜となった。

すると、彼が占めていた空き部屋の扉を、夜更<sup>よふ</sup>けて、こつそりと叩く者があつた。

「私、今夜はお詫びに来たの。実際、根も葉もない怨みを、執拗<sup>しつこ</sup>

く思い詰めていて、今まで、私、ほんとうに悪かったと思いますわ」

早苗は真赤に泣きはらした顔を、左枝の胸のなかに埋めた。波形をなした線、柔らかな呼息いき、そうして丸い形と、高まった頂きを見せた固い乳房が、左枝を焦だたしいまでに唆そそりはじめた。

「私、いままで……。貴方を、なんとかしてしまおうとする時は、そりや可愛がつてあげたの。また、可愛くつて可愛くつてたまらないときは、どうしても、表面は憎み足りないような、あんな所作ぐさをしていたの。でも、勘忍かんしのしてね。私、もうどんな事があつても、一生離れたくないのよ。よう、どうしたの、そんなに黙つていて……」

左枝は揺すられるままに、しかし、眼を据えてじつと天井の一角を睨んでいた。それは、早苗が気づいたら、うち萎れてしまうような冷やかさだった……。

「だが、それは別として、君に訊きたいんだが、君は昨夜、瓦斯ストーブの栓に躓いたようだったね。それまでに、栓がどうなっていたか、気づかなかったかね」

「開<sup>あ</sup>いてましたわ、ごくほんの少しね。だけど……」

左枝はそれを聴くと、早苗の愛撫も忘れて、沈んだように考えはじめた。しかも鼻をひくつかせて、その部屋に漲っている、なにかの香りを嗅ぎ取ろうとした。しかしそれは、早苗にある石竹のような体臭ではなかった。昨夜はあの部屋で、いまここにもあ

る、柔皮花の匂いをいつこうに感じなかった。それなのに、この室では、まるで早苗の情熱から逸散してでも行くかのように、涼しげな、すがすが清々しい花粉の香りがする。ああそれが、昨夜はなせ、かお薫らなかつたのであろうか。

「それから、もう一つ訊きたいんだが、君は一度でも、稲野谷の顔を見たことがあつたかね」

「いいえ、顔は一度も見ませんでした。ただ一度、今年の正月でしたか、開橋式の花火をみんなが見ているとき、女将さんおかみがいそいそと廊下を通りかかり、その時、帰ってゆくらしい後姿を見ましたの。中背の小肥りな人で、女将さんは、あの方を見られるのを、そりや嫌がつていましたわ」



すると、左枝はいきなり寝台のうえに起き直った。彼は、ぜいぜいと喘ぐあえような呼吸いきをして、瞳は、なにかの希望に燃え輝くようであつた。

「分つたよ。早苗、昨夜僕ゆうべが見た首無しは、ありやア、稲野谷兵助じゃなかつたんだ。この事件とは、まるで関係のない別個の殺人なんだよ。だつて考えて見給え。体位から推してみたからつて、どうして、背の高い三伝が、低いあの男の腹を抉れるものじやない。それを今まで、どうして僕が迂闊うかつにも見遁していたのだろう。もともと、一瞥いちべつくらいで特徴が分るものじやないが、とにかく、首無しが稲野谷兵助じやないと分つた」

そうして、左枝の顔に、それまでにはなかつたところの、悽愴

な気魄が泛<sup>うか</sup>び上がった。輸<sup>ゆえい</sup>贏をこの一挙に決しようとするのであろうか、突然立ち上がると同時に廊下へ飛び出した。

客のない、しかも、死人のいるその夜の廊下は、どこにも、ひしむような、冷たい闇が這い漂っている。

左枝は、お勢の室の前まで来ると、早苗を振り向いて、

「これで、分つたろうね。今夜はぜひ、女将を問い訊きなきやア、ならないことがあるのだ」

しかし、扉<sup>と</sup>を叩いても返事がなく、やがて階下の炊事場にいるのを発見した。が、お勢は、左枝の視線を見返して、

「だいぶ今夜は、お前さん、気込んでいるらしいが、なんだい、ここでお悦の身体を焼きたいとでも云うのかね」

「君に三伝を出してもらいたいんだ。どこにいる、あの稲野谷兵助は、三伝の別名じゃないか」

「え、なにを云うのさ」

それには、まったく意外という、その表情は、左枝に全然予期されていたものではなかった。

「お前さん、<sup>からか</sup>揶揄うのも、いい加減にしてもらいたいもんだよ。

せめて、三伝がこの私だと云っておくれよ。知つてのとおり、あれまで <sup>シャンハイ</sup>上海にいたんだからね。顔も知られちゃいないし、せめて私と云うなら、ものの筋が立っているけど、お前さんのように、稲野谷が三伝だなんて云うんじや、私がいま、ここに <sup>すく</sup>竦んでいるのが、とんだ酔興つてことになるよ」

左枝は、杜絶とぎれた言葉の間に、相手の顔の動きを凝じつと見詰めていたが、

「今夜だって、そうじゃないか。いつ三伝が来るかと思うと……戸締りなんぞに頼れなくなってしまうて……私はここで竦こんでいるんだし……成戸は成戸で、今夜はお悦のあの部屋にいるんだしね」

と、その時、左枝の瞬まきがふいに止まったかと思うと、側にあ  
る、瓦斯ガスの計量器のうえに視線が落ちた。

どこかで細目に開いているとみえ、メートルの針が顫ふるえるよう  
な微動を続けている。すると、みるみる間に、左枝は紙のように  
蒼あざめてしまった。

「女將おかみ、これで三番目だ。見給え、この指針の動きが、三伝の呼い吸き使きいなんだからね」

その刹那、この地上における、ありとあらゆる物音が停つたように思われた。彼の言葉どおりだと、いま三伝は、この家の何処いずこかにいなければならぬ。早苗は、恐怖にたまらず男の肩に獅噛みついた。

「じゃ、ど、どこにいるって云うのよ。貴方あんたは三伝が、いつたいどこにいるって云うのよ」

「たぶん、成戸がいる、お悅の部屋だと思ふがね」

しかしその部屋は、昨夜ゆうべと同じようにかたく尾錠びじょうが下されて  
いる。それも、鍵を鍵穴に入れ放したとみえて、合鍵では、尾錠

が揺ごうともしない。金具が、仄かな暖もりをたたえ、瓦斯の燃える音が囁きのように聴える。

そうして、ついに扉が破壊されたのであった。

ところが、しきいまた 闘を跨いだとき、三人は、そのまま心動を停めたよおどろうな駭きに打たれた。

そこには、昨夜と寸分も違わぬ状態で、成戸が床のうえに長々と横たわっているのだ。流れ出た血が、焰に映じて玉蟲色に輝いている。ああ、そうしてまた、その時も柔皮花の香りが鼻に触れてこない。

「殺人が行われるとき、その現場に限って、柔皮花が香りを失うとはどうしたことだろう」

彼は、その花粉の秘密を知ることが、結局、密室の謎を解く鍵ではないかと考えた。

花粉と密室、詩とメカニズム機構——。

それが、神ならでは知らぬ久遠くおんの謎のように彼を悩ました。

「女将、すると明日の晩は、僕か君かということになるね。なにも、そんなに顫えることはないだろうよ。七つの海を股またにかけてお勢ごともあろうものが、この期ごに及んで、なんとという態さまだ」

その翌夜は、また誰かの血が、キラキラする陽炎かげろうのようなものを、立てるであろうと思うと、さすがの左枝でさえも、落着かず自制を失ったように見えた。ところが、夜になると、彼は再びお勢の部屋に現われた。

「むろん、これは確証というわけじゃないがね。しかし今夜は、とくと君に相談があるんだよ。僕は、いろいろに考えてみたんだが、どうやら、銀行に現われたのと、この三伝はちがうようじゃないか。ハハハハ、顔色を変えたって、もうどうにもなりやしないぜ」

そう云つて左枝は、血相の変つたお勢を、憫あわれむように眺めはじめた。ボウという汽笛、そうすい船水の流れ、窓には靄もやをとおして港の灯が見える。

「最初から僕を悩ましたのは、なぜ兇行の都度に、柔皮花の香りが消えてしまうかということだ。僕はそれが、何かの中和現象じゃないかと考えたのよ。あの室に罩こもっていて、覚られてはなら



ぬ香りがあるのを……。オイ、逃げようたって、その抽斗ひきだしに、

何があるか僕にはちやんと分っているんだ。ねえ女将、それを防  
ごうとして、君はあの室へやに柔皮花を持ち込んだんだ。あの香りは、  
エーテルと中和するからね。そこで、君の眼に入りたいものがある  
んだが……」

と、衣袋ポケットの中から、小さな小指ほどの壘を取り出した。嗅ぐ  
と、快い眩暈めまいを感じてくる。

「これをあの部屋の、鍵穴の中から見つけたんだが、ねえ女将、  
君はこんな修行をどこで覚えてきたんだ。君は、鯨蠟をエーテル  
に混ぜて、この中に詰めて置いたね。そして息抜けを作って、鍵  
穴の中に隠しておいたのだ。すると、摂氏十度でこれが氷結する。

ところが、二十五度になれば沸騰をはじめめるんだ。それで、栓がだんだんに持ち上がっていつて、尾錠の梃てこ子を下から押し上げる。扉は明く、そうして、エーテルの噴気で半魔睡に陥ったやつを、君はらくらくと料理してしまったのだ。どうだい、この事件の、天の配剤というやつは、昨夜君が、炊事場をうろついていたことにあつたのだよ。しかし、まだエーテルの魔術は、それだけではなかつた」

お勢の顔には、一抹の血の気もなく、すでに観念しているのか、<sup>せせ</sup>嘲ら笑うような影さえ見えた。左枝は、相手の動作を警戒しながら続けてゆく。

「それは、君が途方もない魔術を使って、稲野谷兵助という、仮

空の人物を作り上げたことだ。ねえ女将、あのエーテルと鯨蠟との混合物は、時によると舞台や高座でも使われる。それが沸騰する時は、しだいに輪廓の外側から消えてゆくのだからね。だからもし、衝ついたて立たにでも人間の形を描いて、気温を高めた場合には、ちようどそれが、遠ざかってゆく人影のように見えるじゃないか。女将、君の企んだその二役には、微妙なこと、まさに人間業わぎとも思われない……まるで、機はたにある梭おさいと糸いとのような計画があつたね。まず、稲野谷という、仮空の人物を作り上げて、それで、三伝の影を君は覆おうとしたのだ。君は牒しめし合わせて、まず三伝に、利得金を奪わせておいた。そうしてから、復讐を兼ねて、いずれ追及してくる、一味の者を順ぐりに殺していったのだ。三伝は黒衣くろぎ

で、君は立役者だ。サア、ここで、君に三伝の在所ありかを教えてもらおう。お願いだ、僕は神となるか、それとも、僕という人生を修正するかの境い目にある。お願いだ、三伝は何処どこにいる。どうして、あの男は死から蘇よみがったのだ」

左枝は、額に粟粒あわのような汗をうか泛べ、その眼は、お勢の唇を凝じつと捉とえていて動うかなかつた。この一つが、実に最後の、苦闘の末すまにようやく恵あまれた、機会だ。三伝を射やつたのは、船場か、矢伏か。どうか矢伏であつてくれ——と、これまで抗争を続け、血みどろに揉こみ合あつていたあの力に、いまは、祈いのらんばかりにす縋たりはじめたのであつた。が、お勢は冷笑を泛はべて云いつた。

「可哀想あはれにねえ。神様かみさまになろうというのも、並大抵なみだいのことじやな

いねえ。ねえ左枝さん、ほんとうにお気の毒だけど、三伝はとうの昔に死んでいるんだよ。あれを射つたのが、矢伏か船場かつていうことも、もし親戚なら、神様にでも聴いてもらおうじゃないか。私はね、実は蔭で、三人を操っていたのさ。それで、殺やったという電報があつたので、すぐ、東京の腹心の者に云いつけたのだよ。そりゃ、私のこつたもの、似た換玉くらいや、印鑑なんぞに事欠いてたまるもんかね。ホホホホ、私の運の尽きがお前さんの自滅というわけかね」

そうして、お勢との勝負には勝ち、ついに人世との戦いには敗れた。彼は、お勢の室を出ると、腕を背後に組んで、黙々と歩きはじめたのである。

その足どりには、とうていこの世の人にはない、緩慢沈鬱の気がみなぎっていた。神とはなんだ。人とはなんだ。神は登りつめ、人は登りつつある間に……早くも登り得ざるを思うのが、人である。そうしてついに、左枝は闘いを放棄した。

翌朝、雨上りの最初の微光が、この悲壮な敗戦者の顔に注がれた。ほの白い、たゆとうような曙を前にして、左枝はこの世を去ったのであった。

ところが、午<sup>ひる</sup>近くになって、早苗が左枝の扉<sup>ドア</sup>を叩いたのであったが、しかし返事がないので、まだ彼が睡っているのだなと思った。今朝こそ、彼女は心に誓って、左枝と新しい生活に入る決心をしたのであった。

「ああ、きつと眠っているんだわ。それとも、女将おかみさんの部屋かしら……」

しかしそこには、早苗の心臓を凍らすようなものが横たわっていた。お勢が、恨み深げな眼を、くわつと宙みひらに睜みひらいて、床のうえで冷たく緯こしき切れていたのである。

しかも早苗は、その髪に驚くべきものを発見した。

と云うのは、それが何あろうか、巧妙な鬘かつらであつて、下は半白の、疎みじらな短みじか毛げであつた。そうして、屍体の手に、一枚の揉みくちな紙が握にぎられていたのである。

左枝君、俺は今朝、お勢でなく、高坂三伝として君に挨拶をし

たい。

俺は、実のところ、殺されてはいなかったのだ。

あの三人の気配を、前々から察していたので、矢伏の拳銃ピストルには、黒鉛の弾丸を詰めておいた。君も知つてのとおり、黒鉛の弾というやつは、発射しても、飛ばずに粉々に砕けてしまうだけだ。後で洗あらい矢やで掃除をしてしまえば、それには寸毫すんごうの痕跡とども止めないのだ。

俺はあの時、乾坤けんこん一擲いつてきの大賭博を打つたのだよ。

それから、船場の自殺も、やはり、俺の書いた血みどろな狂言だったのだ。

俺は、吃驚びっくりする彼に、黒鉛の弾を明かして、どうだ、一番芝



居をやるうじやないか。あの利得金で堪能たんのうするためには、まず船場四郎太を戸籍から抹消する必要がある。そこで、告白の遺書を書かせて、黒鉛の弾を示し、射つたらまず川に転げて落ちて、俺の二の轍てつを踏めと云つてやった。ところが、その弾を、巧妙に実弾と代えてしまったので、慾で船場四郎太はあの世へ旅立つてしまった。

それから、俺はお勢に変装して、二の矢、三の矢の復讐を計ることになった。

オイ左枝君、あの遺書でもつて、実を云うと君にも撃ち返してやったのだぞ。俺は、そうして復讐を終った。このまま、人生は終えてしまうことになるが、眼は眼に、耳は耳に、最後の最後の

一人の、涸れ血までも啜りとったわけだ。その、最後の人というのが誰かということは、左枝君、君が一番よく知っているはずだよ。

実に、悪蟲三伝の、読むだに総毛立つような告白文だった。

嵐は去った。早苗は、和やかな陽差を満身に浴びながら、マスト檣に揺れる港の旗を眺めていた。

彼女は、この極悪人の死を知るのみであって、左枝が、彼女の胸を離れ去っていたことは知らなかったのである。





# 青空文庫情報

底本：「潜航艇「鷹の城」」現代教養文庫、社会思想社

1977（昭和52）年12月15日初版第1刷発行

底本の親本：「地中海」ラヂオ科学社

1938（昭和13）年9月

初出：「新青年」博文館

1937（昭和12）年2月号

入力：ロクス・ソルス

校正：安里努

2013年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 地虫

小栗虫太郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>